

# \*\*\* 今日の健康（9月）\*\*\*

## <マイコプラズマ肺炎 2024年、8年ぶり大流行の兆し>

マイコプラズマ肺炎は発熱や長引く乾いた咳が続く症状が特徴で、子どもに感染することが多く今年には感染者が急増しており、大流行した8年前の2016年以来の高い水準となっています。

感染から発症までの潜伏期間が2週間から3週間と比較的長く、いつ感染したかわかり難く、症状が出て風邪だと思って出歩く人も多いため、「歩く肺炎」とも呼ばれています。

### <マイコプラズマ肺炎の特徴>

1. 肺炎マイコプラズマという細菌に感染して起こる呼吸器の感染症です。
2. 感染者は子どもが多く、症例のおよそ80%は14歳以下です。
3. 症状は発熱や全身のけん怠感、頭痛、せき、皮膚の発疹などで中でも咳は熱が下がったあとも数週間続くのが特徴です。
4. 感染経路は飛まつ感染と接触感染が中心で、学校や保育園、幼稚園など集団で過ごす場面で流行しやすいとされています。
5. 治療は感染しても軽症の場合は自然に回復するのを待ちますが抗菌薬による治療を行うこともあります。
6. 約10%のケースで肺炎を起こし、重症化すると入院が必要なことがあるほか、心筋炎や脳炎などの合併症が起きることもあるということです。

国立感染症研究所によると、今年にはマイコプラズマ肺炎の報告が急増しており、8月11日までの1週間に全国500か所の医療機関から報告された患者の数は1医療機関あたり1.14人となり、大流行となった2016年以来、初めて「1人」を超えました。

都道府県別でみると、多い順に大阪府3.72人、福井県で3.5人、岐阜県が3.2人、東京都2.12人、愛知県2.07人、以下省略となっています。

### <感染の急拡大として9月新学期に注意が必要>

新型コロナウイルスの感染対策が緩和されたことで人々の行動が変わり、人と人との接触が増えたことが要因と思われ、6月くらいから徐々に感染者が増えており、マイコプラズマ肺炎は学校などの集団生活の中で広がりやすく、夏休みが終わって集団生活が始まる9月以降は注意が必要です。家庭内感染などで大人の感染者も憂慮されています。

### <治療の注意点>

従来の抗菌薬を投与して2日から3日以内に解熱しない場合は、薬が効きにくい耐性菌を疑ってほかの薬を投与する必要があります。子どもの場合は副作用の懸念からほかの薬を使いにくく、薬の選択肢が狭まってしまうので、耐性菌の割合が増えないか注視する必要があります。

### <感染対策>

マスクの着用や手洗いといった基本的な感染対策が重要です。感染した当初は一般のかぜと区別しにくく、重症化する原因もはっきり分かっていません。熱の症状やせきが続くときは学校や仕事を休んで、医療機関を受診して必要な診療を受けて下さい。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861  
天文台通り もみじ山公園バス停裏